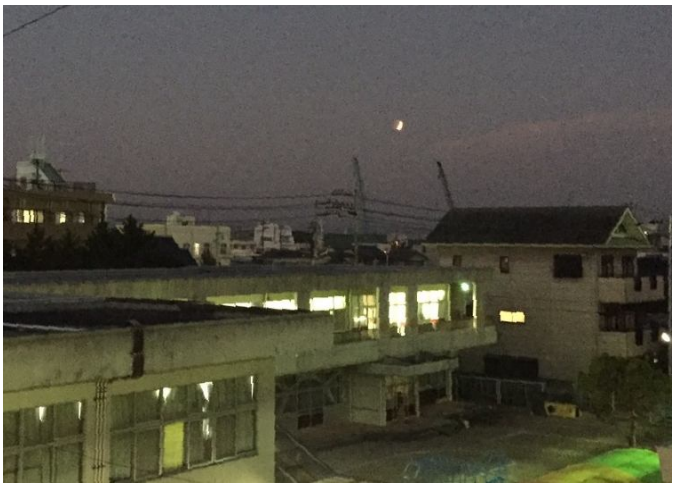
「日々の理科」（第 2690 号） 2021,11,24

「月食の写真集（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka



これは徳島の友人が送ってくれた。彼は大学の同期で、今は出身地で小学校の校長をしている。会議の合間に職場の屋上で撮影してくれた。広角で月の形ははっきりしないが、「月食中の月」ということはよくわかる。ちょうど地球照から昇ってきた感じで、すばらしい写真だと思った。

これは、元同僚が千葉で撮った写真。この方は夜景の撮影が得意で、コンテストで入賞したこともある。最大食に近い時間帯だろう。月の赤さと、右下の「欠け残し」の対比が美しい。少し雲があったのだろうか、月の右下側の空も明るく写っている。今回の月食の日は、関東地方は雲が邪魔していた。その状況の中での撮影に挑んだ意欲が素晴らしいと思った。

これは職場の同僚が撮った写真。実は私が現在持っているコンデジは、この写真の撮影者が勧めてくれた。ポケットにも入るサイズのコンデジだが、授業写真、教材写真、鳥類の写真、夕景、夜景、それに月や天体と、どんなシーンでもオートで完璧に写す。おまけに動画も撮れるので、私も同じもの（後継機種）を購入したのだ。この写真のすばらしいところは「見た目に限りなく近い」という点だ。皆既に近い月食中の月は、写真に撮ると赤が強く出過ぎることが多い。しかしこのカメラは「見た目通り」に写る。実際に肉眼で見た感じも、この写真に近い印象だった。子どもたちに「月食はこんなふうに見えたよ」と伝えるには、最も適した写真である。

これも同僚の作品。帰宅時に大塚駅南口で撮影したそうだ。ビルの隙間に赤い月が浮かんでいて、実に美しい。「東京の街中でこんなふうに月食が見えた」という好例である。